

テリトリー *Territory*

パオロ・ティアウサス

澤田公伸 訳

たとえ自由に空を飛ぶ鳥でさえ、急いで羽根を鳴らして飛ばなければならない。
その箱舟が大砲を振り回しているから。彼らは洪水と同盟を結ぶ。世界のセオリーにわれわれはまだリスト入りしておらず、われわれのどの部分もその新約聖書には載っていない：われわれは単なる例として存在しているにすぎず、将来の外国の世代のために学ばれる教訓にすぎず、欄外の歴史における星印にすぎず（歴史家がこの場所ですら植民地化する時にはこのような括弧付きで）、この世界のスープ皿がこぼれたことを暴露した本の中では文明のカスにすぎない。恐れ多いながらも問いかけるのだが、道端に引っ張り出され、ライフルで入場させられ、銃剣で突き刺され、いくつもの箱に入れられて飛行機によって帰国させられ、肝臓がナイフで開けられ、洗礼を受けた異端者として吊り下げられ、町長の放火によってホームレスになり、自らが耕す農地で飢えに襲われ、射的や厚紙によるトロフィーにさせられ、敵船の影によってちっぽけなものにされたボートの上で沈没させられ、割れたガラスを食べさせられ、塩の上に跪かされ、壊れた墓石を塗り直す余裕のない墓地の土に埋もれるまで骨が生まれたその日から古くなったような、それらの靈魂のためにいったい誰が返済したのだろうか。ああ、私はあなたに答えるようまだ促してはいない。私たちは1ページ目にいて、私はあなたの逸脱をすべて列挙したわけでもなく、あなたの罪はすべて一方の耳に入ってはもう一方の耳から去っていく静的なノイズとなる。でも、私はまだ紹介を始めてもいない。私はまだ真ん中にもいない。虚無の端にもいない。物を創造する神話のすべての中で、いかなる可能性のあるバージョンもしくは修正の中でも、あなたは決して領土を与えたことはなかったが、塵を貸し出す水だけは与えていた。あなたは眼を貸し出さなかったが、自分たちの保釈金を支払うためにわれわれの涙を求めたのだ。

Copyright © 2024 Paolo Miguel G. Tiausas

Translation copyright © 澤田公伸